

# 交渉・説得を外国語としての英語で行うために

## — 高校英語「論理・表現」後の学びへの提案 —

設楽 優子

### 1. 高校英語の「論理・表現」とその教科書

2017年に告示された現行の小学校学習指導要領に則った教科書は、同年度に出版社により作成され、2018年度中に検定されたという。2018年に告示された現行の高等学校学習指導要領による授業が始まったのは2022年入学者の授業からで、2024年度に学年進行が完成する。公益財団法人教科書研究センターに附属する教科書図書館には、すでに利用されている教科書と、まだ授業で使用されていない教科書が別々においてある。本稿を執筆中、検定は合格しているが、まだ授業で使われていない英語の教科書は「論理・表現 III」のみであった。

現行の高等学校学習指導要領の外国語科目には「英語コミュニケーションI・II・III」、「論理・表現 I・II・III」の6科目がある。「英語コミュニケーション I」は外国語科で英語を履修する生徒全員が履修し、2科目群はそれぞれ、原則としてIIIはIIの後、IIはIの後に履修することとされている。しかし、この6科目用の教科書の中で、「論理・表現 III」の検定結果が最後に出たようだが、一方、「英語コミュニケーションIII」は、何かの理由で早く利用されはじめたようである。

文科省は、教科書検定会議のことを正式には教科用図書検定調査審議会と呼び、この審議会の第7部会は、外国語科である。2022年度に、この部会は高校の「英語コミュニケーションIII」、「論理・表現 III」と、小学校の英語の教科書2社からの申請を審議するため、計16回の審議を行った。出席した委員はいずれの回も7名で固定されていた。最初の5回と第11, 12回は「英語コミュニケーションIII」、第6, 7, 8回と第13, 14回は「論理・表現 III」、第9, 10回と第15, 16回は小学校英語を審議しており、それぞれの教科書が2ラウンドずつ審議されたことになる。議事要旨においては、「調査意見△番の指摘事由を変更」、「調査意見をそのまま検定意見とする」などの記載ばかりで、教科書内の場所の指摘に出ている英語の中にはうっかりミスなどが分かることがあるが、

調査・検定どちらの意見内容も全く不明である。「論理・表現」が「英語コミュニケーション」よりも昔の受験英語の負の遺産を抱えているかどうか不明である。

筆者が高校生だった1980年代、英文法とかコンポジション(英作文)とか呼んでいた科目があった。文単位の和文英訳ができる教科書で学び、レッスン構成は話題のジャンル別だったような気がする。そして、上で触れた教科書図書館で、ひとりの大学生に2, 3社の「論理・表現 III」の教科書を見てもらおうと、彼女が学んだ「英語表現 I・II」の教科書・副教材と、レイアウトは異なるものの、内容はそっくりとのことであった。文単位の英語例文集というのが、これらの教科書のスタート時点の姿で、数十年の編集の慣習の影響が残っているのかもしれない。

学習指導要領解説は、科目群「英語コミュニケーションI・II・III」について、学習する語数の目安を示し、「論理・表現 I」には、定型的な語句を例示しているが、「論理・表現 II・III」にはそのような語数や例示がない。学習指導要領の改訂以前は「英語表現I・II」しかなく、改定とともに「英語会話」という科目は廃止されたから、それに代わった「論理・表現 III」の編集は難しかったのかもしれない。

某ネットの質問投稿サイトで、「論理・表現 III」を開講しない高校の生徒が「この科目は大学入試に必要か」と質問していた。それに対し、『「論理・表現 III」では学ぶべき文法事項がないから不要』(yu0\*\*\*\*\* 2022)とした回答がベストアンサーになった。扱うべき文法形式の指定がない点では、「論理・表現 I・II」もそうであるが、発信力の測定や評価の難しさが、この英語力の養成を妨げている。大学に発信力も測定する外部試験の導入や実務経験者を増やす動きがあっても、なかなかこの現状は変わりにくい。

学習指導要領の意図と高校関係者側の受け止めのすれ違いは、ネット上のブログなどからもうかがえる。「英語論理・表現」などの表現で検索すると、

新課程が開始して間もない2022年当時、プロ家庭教師の方は、『論理・表現』の教科書は例文が少ない。それよりも、副教材やワークブックならば、旧課程の英語表現の教科書ほどではないとは言え、例文が多いので、そちらを使って試験対策をするように」と勧めているものがあつた（英語専門プロ家庭教師2022）。高校生にとって身近な人たちは、教科書出版社の本科目群の内容説明ほどには、学習指導要領の意図に関心がないようである。

## 2. 「論理・交渉・説得」の英語教育改革

外国語科の科目群名称「論理・表現 I・II・III」は、現行の学習指導要領が告示される2年前の2016年に発表された中教審答申第197号の本文内に登場済みであった。その中で、この科目群は「発表や討論・議論、交渉の場面を想定し、外国語による発信能力を高める科目群」(p.110)として設計されている。この答申の「別添13-5」のチャートにおいても、その直後に位置する「参考資料」数ページにおいても、この科目群には「グローバル化に対応した英語教育改革」の集大成とも言える位置づけがなされ、大きな扱いであった。グローバル人材は英語で発信できなければいけないとされた。

現在、学年進行が完成し、高校生はどのように英語と付き合っていきたいと考えているだろうか。今は、しっかりした日本語さえ書ければ生成AIが瞬時に自然な翻訳を提供してくれるので、なかには実のところ英語運用能力は放置して、もっと別のことに力を注ぎたい人が日本社会全体では多数派になるのではないか。

この科目群の「論理・表現 III」に注目して、指導要領解説—外国語編—第1章総説の本科目の概要説明を引用してみよう。ここには、論理と説得の両方の語が使われていて、英語教育改革の先駆的な指針であつたことがうかがえる。

原則として「論理・表現 II」を履修した後に、更に英語の履修を希望する生徒の能力・適性などに応じて選択履修させる科目として創設した。特に、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、複数の段落から成る文章を書くことなどを通して、聞き手や読み手を説得できるよう、論理の構成や展開を工夫して、話したり書いたりして詳しく伝える又は伝え合うことなどができるようになること

を目標としている。(p.10)

科目群「論理・表現」のデザインに話を戻して、中教審答申第197号は、この発信の科目群が養成する英語力の発揮される場面として「発表や討論・議論、交渉」を想定していた。交渉という語は、発表・討論・議論とならんでいるが、筆者には異質に感じられ、興味深い。高校生が社会人になったつもりで商談の言語活動を行えば、とりあえずは「場面」と言えるだろう。しかし、それでは、生徒にとって身近なシチュエーションではないだろう。より言語活動らしい、意味ある発信につなげやすい交渉とは何であろうか。学習指導要領解説には次のみごとな交渉の例が一つある。

学習指導要領は「論理・表現 II」の科目の目標の一つとして、「・・・立場や状況が異なる相手と交渉したりすることができる」(下線筆者、以下同じ)ことを定めており、その解説内に、交渉とは「客と店員のように立場や状況が異なる相手と互いに納得する結果を引き出すために話し合うこと」であると定義されている。そして、同じく「論理・表現 II」の言語活動例がみごとで、例えば、グループのメンバーに、海外留学を希望する生徒、保護者、教師、などの役割を与え、それぞれの意見等が書かれた紙を読み、やり取りして話し、各自が他者の意見を受け止めた上で即座に判断をしつつ意見の調整と情報の突き合せをしていく交渉言語活動の例を提示している。

なお、「交渉」の語は外国語編に7回、英語編に3回出現している。

このようなロール・プレイングの活動には、適宜、英語表現上の支援をするようにとも「論理・表現 II」の目標に書かれている(p.102)。そのためには良質なモデル会話などが必要になるが、これを主に教科書や教員の創作に頼ると、「交渉」という場面設定は、日本的な話し合いスタイルを援用しがちになるか、教師や生徒がステレオタイプ的に英語圏文化と考えるスタイルに固まりがちにならないだろうか。それならば、たとえ数多くは扱えなくても、批評に耐えうるような文学作品を平易に書き直したものも含め、様々な分野やスタイルの英語からも教材を得た方が良いのではないだろうか。そのほうが、よりオーセンティックな「交渉」に迫ることができるように感じる。生徒たちが文芸を嫌いならば仕方がないが、味わい深い言語活動の実例はむしろ文学作品に多い

はずである。

この科目群の名称の中の「論理」という語を推奨したのは、中教審の教育課程部会の高等学校部会の方々であったろう。中教審のこうした答申を受けて、外国語科学習指導要領解説では「説得力」はキーワードであり、説得力の源泉は論理性にあるという前提から目標や言語活動内容を繰り返し説明している。この「説得力」という表現が最初に登場しているのは、「英語コミュニケーションⅠ」の言語活動の内容の解説内である (p. 46)。

読むことの活動(イ)の社会的な話題の論証文を読み取って行う活動において、「論理的で主張のある文章に十分触れることが、論理的な文章の構成や論理の組み立て方、説得力のある表現などを学ぶことにつながる」のであり、そのように『読むこと』を通して培われた論理性が、発信3領域(「話すこと[やり取り]」や「話すこと[発表]」、「書くこと」)における『論理的に表現する能力の土台となる』ことを念頭に置き指導するように」と説明している。

この次に「説得力」が登場するのは、「英語コミュニケーションⅢ」の中の、社会的な話題について話すこと[やり取り]に関する目標の解説内であり、「生徒が課題の解決策を提示するに当たっては、課題の解決のための根拠となる資料を収集したり分析したりするなど、説得力をもって相手に説明するために事前の準備を行うことが求められる」(p.77)としている。社会的な話題を扱うとき、説得力を高めるためには論理性と、確かな事実の収集の2つが重要である、としているようである。

同じ「英語コミュニケーションⅢ」の話すこと[発表]に関する目標の中では、日常的な話題について口頭発表することに関する目標の解説内に、「英語コミュニケーションⅡ」の目標内の「論理性に注意して詳しく話して伝えることができるようにする」を発展させて、「論理的に詳しく話して伝え合う」とは、「理由や根拠の適切さや、どのように述べれば説得力が高まるかなどについて考え、論理性を高めるための工夫をしながら、理由や根拠などを詳細に説明するなどして話して伝え合う」(p. 78)と解説している。つまり、論理性を高めることと理由や根拠を詳細に説明することが説得力を高める前提であるということを繰り返している。同科目の、[やり取り]ではない方の「話すこと[発表]」の目標の解説も、だいたい同じである (p. 78)。

続いて、同じ「英語コミュニケーションⅢ」の目標で、今度は「書くこと」に関する目標を見ると、分量はⅠが1文程度、Ⅱが1段落程度なのに対してⅢは複数の段落から成る文章をアウトプットできるようになることを目標の一つに掲げている。しかし、要領内の論理的に詳しく「書くこと」についての解説は、先に述べた、「話すこと[発表]」をする際の説明と変わった点が全くない。繰り返が多いことは、説得力や、論理性や因果律などとの説得力の関係が、言語コミュニケーションの5領域以外の次元の世界に属していることの表れなのかもしれない。しかし、説得力についてこのような理解のしかたでは、書き言葉も温かみを欠いた、没個性なものになってしまうかもしれない。

教員は指導要領解説を受け取ってそれに従う義務があると考えられる。しかし、例えば、企業で英語による説得的発表を指導したり転職支援をしたりする人々は、文書による発表と口頭による発表の際の目標や工夫点に同一の解説を加えるであろうか。指導要領は法的性格を持つ文書ではあるが、この状態は、硬直化しすぎてはいないだろうか。学校現場にとってはむしろ机上の論説だという印象はぬぐえないであろう。

「論理・表現Ⅰ・Ⅲ」の要領とその解説の中の「説得力」という表現の前後には、具体例が多くあり有用である(Ⅱはp. 97)、(Ⅲはpp. 114, 115, 118, 120)。「説得力」の語が外国語科の章の後の、英語科の章内に出てくるのは、「ディベート・ディスカッションⅡ」の話すこと[やり取り]の目標の解説内(p. 199)の一度だけである。

ここまで見た現行の高校外国語科英語科学習指導要領解説内の、繰り返されている語句とその出現回数を表1に示し、解説を含まない要領本体の英語試訳内のいくつかのキーワードとその前後の語句の出現回数を表2に示した。要領本体の語句の解説の中に、同じ語句が含まれているのは当たり前であるし、長い表現よりも短い語句の繰り返しならば自然である。繰り返しが全て悪いわけではないが、長い字数に渡って同じ表現が再三繰り返された解説部分には、あまり情報価値がないとも言える。表1に含めなかった、比較的短い表現とその回数は、以下のとおりである。

論理性に注意	69
論理性	76

論理	504
聞き手を説得	20
読み手を説得	14
説得力	12
説得	60
交渉力	0
交渉	10

(交渉 10 回の内訳は、「論理・表現 II」の目標・言語活動と、この科目を他の科目で引用している例を合わせて 7 回、「第 2 部 英語編」内で 3 回。)

### 3. 言語機能と説得

学習指導要領解説の第 2—第 2 節の科目「英語コミュニケーション I」の「2 内容」内には「(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項」—「② 言語の働きに関する事項」という項目があり、この②は「ア 言語の使用場面の例」と「イ 言語の働きの例」の 2 つに分かれている。アは主にコミュニケーションツールと 5 領域の言語活動の組み合わせから成る「場面」例と解釈し、イは狭義の「言語の働き」の例と考えることができよう。また、②はアとイを合わせた項目であるから、広義の「言語の働き (言語機能)」であり、イは狭義である。学習指導要領はイの言語機能を 5 つのグループに分類し、例と共に (ア) から (オ) までを提示している (pp. 56—57)。グループの名称や例から判断すると、発話行為理論の中の、発話内行為の英語名称と一致しているものがあるので、その名称をグループの後に記して下に示す。

- (ア) (コミュニケーションを円滑にする) 相づちを打つ等、
- (イ) (気持ちを伝える) 共感する/褒める/謝る/感謝する/望む/驚く/心配する等、Expressives
- (ウ) (事実・情報を伝える) 説明/報告/描写/理由/要約/訂正等、Assertives
- (エ) (考えや意図を伝える) 提案/申し出/賛成/反対/承諾/断る/主張/推論/仮定等、
- (オ) (相手の行動を促す) 質問/依頼/誘う/許可/助言/命令/注意をひく/説得等、Directives

最後の(オ)のグループ名は「相手の行動を促す」で、中学で扱われているものに追加された働きは「誘う/許可する/助言する/注意をひく/説得するなど」であるとのことである。この例示の中に残るのは「質問する/依頼する/命令する」なので、なるほど中学校

までに習う単純な言葉が含まれている。

科目群「論理・表現 I・II・III」が聞き手や読み手を説得できるように話したり書いたりすることを重視しているので、説得という現象について発話行為理論がどのような分析をしているのかを見た。

Reiss (1985: 25)によれば、説得するために何かを話すという行為は、その発言者の意図を表現しているとは言えず、その発言が相手に理解されて、相手の考えなどの何らかの行動を変化させないうちは、その意味が成立したとは言えない。

ある言語表現の説得力の有無多寡は、発言者と相手の文化・経験・場面・文脈など個別の条件によるところが多い。したがって、説得する意図でなされた発言の説得力は、その発語なり発言形式・方法を選択した人だけの責任とは言えないことになる。もしも、この考えの筋道のどこかに間違いが含まれているのであれば、ある人が自分の発言の説得力を増加させるということは、その人の努力のみで保証できることではないのではないか。ある特定の文化なり人の集まりの中で、どのようなメッセージをどのように話すと説得力をだせるのかを考えることはできても、究極的には、その効果は、聞き手次第なのではないだろうか。

### 4. 表現よりは構造の方が有効では？

2022 年ごろのこと、ブリティッシュカウンシルと東京外国語大学が共同開発したスピーキングテスト (BCT-S)があるとネット新聞で知り、オンラインで試用受験できると聞いて、試してみたことがある。最初の問題では、広いリビングルームの写真が表示され、少しの間静かに準備をしたのち、そこに写っているものを描写する問題だった。筆者は片っ端から描写してただべらべら喋った。その採点結果は待っても表示されなかったが、描写はどうあるべきかという計画がなかったので、良い点は取れなかったと思う。

1985 年に筆者は米国バーモント州の小さな大学で週 180 分のパブリック・スピーキングの授業を受けた。米国では、高校でもそんな授業があると聞いたが、筆者の習った先生は、「うろうろ歩かずに、用意したメモを時々見ながら、読み上げないで、クラスに向かって話す」方法を教えてくださった。事物の描写から始めて、最終プロジェクトは、学生全員が何かの説得をする内容のスピーチをした。物の基

本情報は、大きさ、形、色、素材などと教わった。その後でその物にまつわる話を少ししてもよいと習った気がするが、良く覚えておらず、その学びは2022年にBCT-Sを試したときにも活かされなかった。

2023年に愛場(2019)を探して入手し、読んでみて目からうろこが落ちた。このビジネス英語教材の「説明・描写をする」章では、物を描写するために、①基本情報、②詳細情報、③自分の考え・自分との関係、という3つの構成要素を盛り込む必要があると書いてあり、各構成要素で使える例文やモデルスピーチが載っていたのである。基本情報を最初に入れておけば、詳細情報だけ散らばらせて時間切れになるということも少ない。このように、賢い人、育ちの良い人ならばおそらく自然にできると思われることを、正面からこのように教えてもらえば、自分も実行できると考えた。そのほか、悪い知らせを伝える時には前置きが必要であることも、何か依頼するときには相手の負担を軽減する配慮があるとよいことなども書いてあった。一連の会話を行うとき、踏まえておくべき構造があると意識できるかどうか、便利な表現をやみくもに覚えることよりもずっと有効に違いないと考える。ほんの少しの心づもりをすることが、会話に大きな違いをもたらすはずである。相手のことばにも臨機応変に反応し、自分の発言内容も計画しつつ、会話を行いたい。

会話にはパラグラフ・ライティングやエッセイ・ライティングのような構造がない、と決めつけるのは間違いではないだろうか。スピーチにはもちろん構造があるが、一連の即興の会話にも、構造があつてよい。また、一言の発言の中にも、「もうすぐ本題に入る」とか、「もうすぐ口を閉じるから、そうしたらお話しください」などの信号が含まれていて、手話使用者・指文字の使用者たちは、自分たちとそのような信号体系を共有していない人との間ではコミュニケーションに支障をきたすことがあるそうである(市川2011)。

重大な依頼・謝罪・褒める・褒め言葉への反応・軽い命令・感謝などの発話行為でも、私たち会話者は、様々な表現・構造のレパトリーの中から選択し、数多い信号を載せて発言したり信号をキャッチしたりしているに違いない。

## 5. 外国語で発信中は嘘をつけない？

若い人が外国に行くと、常に下手に出る習慣がつくことがある。その土地の事情をよく知らないので、周りの人にいろいろ教えてもらうため、幼くなる作戦が有効だからであろう。外国人との会話でも私たちは色々と信号の送り合いをしたり、誤解したりしている。

異文化間交流をして、たとえば英語では、英語が母語の人からみて、外国語としての英語の発話がかわいらしく思えることがあるようだ。実感を伴っていないような、つたない言葉遣いは、自然ではないところがチャーミングなのかもしれない。

あるアメリカ人の先生が文学の授業で私たちのレポートを返却する前に、こんな話をしてくださった。彼がアメリカで教えていた時は、学生が自分で理解した内容をレポートに書いているかどうかは、すぐには分からなかった。が、日本で、外国語である英語で書かれたものは、書いた人が理解した上で書いているかどうかが目瞭然だったそうである。おそらく、部分的な引用を複数つぎはぎするとき文法的非文ができてしまうことを指していたかと考える。当時筆者は「レポートを書くときに、自身に何も考えがなければ、本で読んだことや誰かから聞いたことを取り入れていくしかなく、母語でも外国語でもレポートは難しい。できるだけちゃんとクレジットするしかない。」と考えたことを思い出す。教師になって留学生の指導もしたことがあるが、考えの正しいクレジット、とりわけ外国語でのそれは本当に難しいと思う。

とにかく、書き手が母語で書いているならば、知ったかぶりのもっともらしいことを書いて、上手に嘘が付けてしまうことがある。どの言語でも、母語話者は形だけちゃんとしているような嘘が上手なのである。

外国語学習者には、母語ならば自由自在に制御できるそのような能力が奪われているので、その発話も作文も、通り一遍のことやただの真似しかできず、個性ある文章などいつになっても書けない気がしてくる。本から引用をしても、自分の言葉で言いかえることも難しい。即興で話す場合はなおさら、外国語でまとまった内容を発表したり、やりとりしたりする力をつけるのは難しい。レパトリーが狭すぎる。

TEDトークでは、外国語としての英語で話しているプレゼンターもいるが、そういう人も、友達に話

すように飾らずに話すようにしていると何かで読んだことがある。

何かでムーブメントを起こしたいなら、話し手は、まず聞き手の信頼を得て、自分が語りたい内容に対して自分と意思を共有してもらいたいだろうと考える。聞き手に共感や納得をしてもらおうことが発表には大切なはずだが、もし、文章を読み上げるだけの発表であれば、それはそのどちらの反応も引き起こしにくいであろう。その文章を黙読する方が、よっぽど伝わりやすいだろうと思う。

文章ならばなんとか交流できる人、電話の音声通話が苦手な人、ビデオカメラを前に固まってしまう人など、世代や個性や環境によって、さまざまな支障がありうる。そういうことも、私たちの音声コミュニケーション研究の現場となりうると思う。

話は少し変わるが、口語と文語の距離は、個人だけでなく、言語によっても違うようである。日本語の文章を添削するとき、「読み上げてみて流れが悪ければ書き直すべき」という教を筆者は聞いたことがないが、文学にも言語学にも精通した、あるイギリス人の学者が、そう講演で話されていたのを聞いたことがある。歌のように流れが良すぎても、歌自体が面白くなってことばの意味が伝わらなくなることもある。しかし、つかえつかえにしか読めないような文章は、もっとバランスよく流れるように書き換えるべきだそうである。あまり流れが速くても、相手に何も記憶を残さないことがあるが、滞ってばかりの文章は、書き直して滑らかにするべきとのことであった。

## 6. 自分たちの耳で音声コミュニケーションを研究し習熟したい

確か平田オリザさんの言葉だったと思うのだが、舞台上、例えば浮気がばれないようにうそをついているような人を演じるには、会話の相手の言葉が終わるか終わらないかの内に、少し早いタイミングで言葉を返してしまう演技をするのが正解であるとのことであった。こうすれば、うそをつこうと意識して準備しすぎてしまったことが表現できるのである。これをはっきり大げさにやってしまったら、つまらない劇になるだろう。しかし、平田さんの舞台に出てくる石黒浩さんが作られたロボットの発言を同様に制御したら、私たちは、ロボットが嘘をついていると感じるだろうか。人よりもより大げさな演技で

なければ、観客は感じとれないかもしれない。このように、生の音声コミュニケーションには、耳を澄ましてやっと思いつけるタイミングの差と、耳を澄ましても分からない差があるはずで、その音声を話しているのが人なのか、それとも人ではないのかによっても違ってきそうである。

私たちは何に説得されたり、共感したり、協力しなくなったりするだろうか。論理的・合理的な判断の積み重ねだけで人間が行動していないことは、行動経済学が教えてくれている。

言語音声に関して何かを研究したいのであれば、できるだけオーセンティックで自然な音声や動画を使い、普段の何気ないコミュニケーションの観察からも、普通の英語の語学授業からもヒントをいただいて、感じることを大切にしたい。そして、感じ取れた2つのものの差や、違和感などを、言語化した。できれば教室の自分たちで、自分たちの感覚から研究をしたい。学問上の慣習となっている結論を探して来て組み合わせることで説明したことにするのではなく。

社会人一般向けに、英語や日本語で良いプレゼンをするための助言は、ネットに沢山ある。講師の方々が外国や日本で得た経験から語っている。筆者にはビジネス経験が非常に少ないが、発話行為に注目してビジネス英会話を教えている愛場 (2019) には、経験で確かめられた実践的な学習があると思う。同様のアプローチをこれからもフォローしていき、学生に紹介したい。

良いプレゼンテーションについても、NHK Eテレの『プロのプロセス』の第13回「プレゼンテーションのしかた」という番組 (2023年12月25日放送) は示唆に富んでいた。そこで、河野さんというプレゼン評価のプロが、「誰に何をいつまでにしてほしいかを伝えることが大切です。論理的な説得は長い間行動変容をもたらしますが、情緒的な説得は熱しやすく冷めやすい傾向があります。」と言った。別の人のネット上の助言で、「説得されるか・されないかは受け手が決めることです。」という趣旨のものもあり、参考になった。このような助言は、人によっては当たり前すぎて気に留めないと思う。が、もし、こういう基本ができていないためにうまくいかない人を実務経験者がみたら、すぐに気づかせてくれる点ではないか。基本的情報を押さえた方が成果に結びつきやすいと考えられる。こういうことは、外国語で

も母語でも使える汎用的なスキルではないか。

経験者たちに学ぶだけでなく、学生が直ぐにそこから感じて何かを発見できるような、英語の音声や書き言葉の教材を具体的データとして提示して、データから感じたことを彼らに言語化してもらいたい。そして、彼ら自身で仮説を立て、他のデータを足して、検証していくような、発見のある学びをファシリテートできたらと希望している。学生たちの実感・経験・感覚を大切にできれば、先輩社会人からも学びやすい柔軟な頭に学生と一緒に変わっていきえるだろうと考える。このような学びを志向していれば、一方的に知識を与えることに慣れている自分の授業を少しずつでも変えていけるであろう。

このような発見的外国語教育の例に、池田 (2009) の日本語教育実践がある。そこでは、茨城大学の日本語を学ぶ留学生たちが、村上春樹と太宰治の作品を1つずつ、まず語学的に学んだ上で、両作品を読んで受けた印象をクラスで言語化し、学生によって、作品によって、それぞれの作品の中の場面によって、何がその印象の違いをもたらしているのかを考えた。文体論で研究されていることを理解することが目的ではなく、自分たちの感覚から出発して、発見していった。筆者が教える英語の授業のごく一部の時間でもいいから利用して、こんな実践をマネする試みをしたい。また、英語音声学ならば、複数の動画・音声サンプルを選んできて、学生に違いを聞いてほしい。こういう方法は準備に時間がかかると思うが、手ごたえもあるだろうと想像する。

近い将来グローバル人材として活躍する人たちは、まだあまり「論理・表現 III」の恩恵にあずかっていないかもしれないが、英語で口頭発表をするという話題に関して、筆者は、誰でも自分の学びを、次の3つのすべての立場に立って、継続していくのが良いと考える。

- 1) いろいろな社会問題・環境問題などの分野ごとに、よく使われる単語・定型表現に習熟し、まずは1分あたり100語程度の速さで英語を話そう、という立場(九州大学内田諭先生 2023年 全国英語教育学会特別講演会「AIを用いたスピーキングの評価の可能性」)。
- 2) 論理的な文章を読むうちに説得力のある考え方とそれにふさわしい表現ができるようになる。しっかりとした典拠により、事実に基づいて話すのが大切。理由や詳細の説明が整理され

ていて分かりやすく、時系列の経緯説明、時系列の行動計画を示すことも大切とする立場。

- 3) 真実味は信念・個性・情熱から生まれるので、その信念が大切とする立場。理想や目標の実現に向けて人の協力を得られるよう、良好なコミュニケーションに努める。SDGs など、世界の多くの人の喫緊の問題に共感し考え行動する。また、協力してもらうには、相手の負担を軽減する配慮も必要。小さなことから率先して実行し、人にも参加を勧める立場。

文科省(2019)の一覧表によると、科目群「論理・表現」の英語名は English Logic and Expression である。上の3つの立場を英単語で思い出せるようにするならば、(1) Expression, (2) Logic, (3) Passion であろう。(3) は愛場 (2018) さんの動画の終わり近くの発言から、拝借している。

筆者は (1) から (3) も良いが、学生が授業で「自分で言語音声を聴き、得た感覚を言語化して他者と共有し学び合う、発見の喜び」を感じていただければよいと思う。リアクションペーパーに学生が「先生の...という説明が腑に落ちた」も嬉しいが、何か他のこととの共通点に「気付いた」という発展があることがより嬉しい。発見の喜びを一言のモットーにして、アクロニムするとしたら、Eureka! (ユリイカ)、ギリシャ語からの翻字 (0) Heúrēka として、(0) から (3) の頭文字を合わせると HELP となる。このモットーは宣伝してもあまり収穫がないかもしれないが、自分のモットーとして置く分にはよい。4つとも身近なところから始めたい。

表 1. 現行 高校学習指導要領解説 外国語科編英語科編  
 中の表現とその出現回数 (太字は筆者)

読み手を説得できるよう	9
読み手を説得できるよう, 論理の構成や展開を工夫して 複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝える	6
読み手を説得できるよう, 論理の構成や展開を工夫して	8
読み手を説得できるよう, 理由や根拠を効果的に提示	1
<b>論理の構成や展開を工夫して</b>	84
論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で 詳しく書いて伝えることができるようにする	24
論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で 詳しく書いて伝えること	28
論理の構成や展開を工夫して複数の段落から成る文章で 詳しく書いて伝える	32
<b>聞き手を説得できるよう</b>	10
聞き手を説得できるよう, 論理の構成や展開を工夫して ・・・話すこと[発表]の中に	6
・・・話すこと[やりとり]の中に	3
聞き手を説得できるよう理由や根拠 ・・・話すこと[発表]の中	1
聞き手を説得できるよう, 理由や根拠	0
<b>論理の構成や展開</b>	108
<b>理由や根拠</b>	117
聞き手や読み手を説得できるよう ・・・共に論理・表現Ⅲの中	2
聞き手や読み手を説得できるよう, 論理の構成や展開を工夫して, 話したり書いたりして詳しく伝える又は伝え合う	1
聞き手や読み手を説得できるよう, 論理の構成や展開を工夫して話したり書いたりして詳しく伝える又は伝え合う	1
<b>スピーチ, プレゼンテーション, ディベート, ディスカッション</b>	9
面接やスピーチ	1
一つの段落の文章	8
複数の段落から成る文章	65
複数の段落から成る文章を書く	8
まとまりのある文章	4
まとまりのある文章を書く	3
物語とは, ある事柄について筋道をたどって書かれた まとまりのある文章を指し	1

表 2. 『平成 30 年改訂高等学校学習指導要領英訳版  
 (仮訳) 外国語』中の表現 (大/小文字の区別なし)  
 とその出現回数 (space の有無の区別もなし)

interactive	1
interaction	47
interactions	15
spoken interactions	8
extended interactions	6
examples of interactions	1
interaction pattern(s)	8
speaking [interaction]	14
interaction.	6
present	39
present and write	8
presentation	27
presentations	17
... presentations and exchange their own opinions and impressions	12
... the presentations and exchange their own opinions and impressions	10
... and presentations and exchange their own opinions and impressions	2
speeches and presentations	6
... such as speeches and presentations	1
... the speeches and presentations	2
... brief speeches and presentations	1
... lengthy speeches and presentations	1
... make speeches and presentations	1
essay	0
interviews	1
debate(s)	9
discussion	7
discuss (全て上の語と同一、動詞は 0.)	7
paragraph	20
a paragraph	4
paragraphs	8
a multi-paragraph passage	8



\*引用文献（主著者が和名のもの）

愛場吉子 (2018) 「オーディエンスは 10 分で飽きる？ 日本人が英語プレゼンを成功させるための 3 箇条」『西澤ロイの頑張らない英語』  
<https://logmi.jp/persons/1225> (2024 年 2 月 1 日最終閲覧)

愛場吉子 (2019) 『話す英語』東京: アルク.

池田庸子 (2009) 『読解教育における文体に関する一考察』茨城大学留学生センター紀要 7 41-51, 2009-02.

市川熹 (2011) 『対話のことばの科学』早稲田大学出版部.

英語専門プロ家庭教師 (2022) 「論理・表現の勉強法（高校英語テスト対策）」  
<https://eigominaoshi.com/logic-and-expression/>  
(2024 年 1 月 31 日最終閲覧)

河野理愛・NHK (2023) 「プレゼンテーションのしかた」『プロのプロセス』教材 今回のまとめ, NHK E テレ.

中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』（中教審第 197 号）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm)  
(2024 年 1 月 31 日最終閲覧)

文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 外国語編 英語編』  
[https://www.mext.go.jp/content/1407073\\_09\\_1\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf)  
(2024 年 1 月 31 日最終閲覧)

文部科学省 (2019) 『平成 30 年改訂高等学校学習指導要領 教科・科目名英訳版（仮訳）』  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/07/08/1417610\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/07/08/1417610_001.pdf)  
(2024 年 2 月 1 日最終閲覧)

文部科学省 (2022 - 23) 『教科用図書検定調査審議会令和 4 年度第 7 部会 開催状況』（第 1 回 ー 第 16 回 議事要旨）  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/tosho/023/127/giji\\_list/index.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/tosho/023/127/giji_list/index.htm)  
(2024 年 2 月 1 日最終閲覧)

文部科学省 (2023) 『平成 30 年改訂高等学校学習指導要領英訳版（仮訳）外国語』

[https://www.mext.go.jp/content/20230328-mxt\\_kyoiku02\\_100014466\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230328-mxt_kyoiku02_100014466_001.pdf)  
(2024 年 1 月 31 日最終閲覧)

\* 引用文献（主著者名がアルファベット表記）

British Council・東京外国語大学 「東京外国語大学の入試で実施されている、スピーキングテスト (BCT-S) を紙上体験してみましよう！」  
[https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/exm-bct-s-demo\\_test\\_description\\_0.pdf](https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/exm-bct-s-demo_test_description_0.pdf)  
(2024 年 1 月 31 日最終閲覧)

Reiss, Nira (1985), *Speech Act Taxonomy as a Tool for Ethnographic Description: An Analysis Based on Videotapes of Continuous Behavior in Two New York Households*. Philadelphia: John Benjamins.

yu0\*\*\*\*\* (2022) 「・・・論理表現 III は大学入試で必要ですか？」  
[https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q12262102897](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12262102897) に対するベストアンサー (2024 年 1 月 31 日最終閲覧)